黒い竜と白い竜

伊藤　凛

むかし、遠いとおい空の上にひとりぼっちの黒い竜がいました。黒い竜は仲間である他の竜たちからは「真っ黒なうろこにギラっとした金色の目、同じ竜だとは思えないよ。」と言われていました。なぜなら他の竜たちのうろこは青や緑色で目は黒色のものが多かったからです。黒い竜はそんな自分の見た目が大嫌いでした。

ある日のこと、黒い竜は雲の上を突き抜けた大きな山を見つけました。すると山の中心がキラっと光って見えました。黒い竜は不思議に思い、山の中心へと向かいました。山の中心には大きな洞窟がありました。洞窟の中におそるおそる入っていくとそこには、大きな白い竜がねむっていました。

黒い竜はおどろきました。今まで何十年も生きてきて白い竜を一回も見たことがなかったからです。さっき一瞬キラっと見えたのは、この白い竜のうろこだったのです。するとその時白い竜がゆっくりと目を開けました。

黒い竜はまたおどろきました。この白い竜の目は黒い竜と同じ金色の目だったからです。黒い竜は、ぼうぜんとしていました。白い竜は黒い竜をじっと見つめました。すると白い竜が「何の用だ」と言いました。黒い竜はあわてて言いました。「この洞窟の中から光る物が見えて、あれは君のうろこだったんだね。君みたいな白い竜は初めて見たよ。」

その時白い竜が「私は白く美しいうろこを持っているけど飛ぶことができない竜だ。」

その言葉を聞いた黒い竜は、なぜ飛ぶことができないのかを尋ねました。

「私はむかし、仲間の竜とケンカをしてしまってね。その時に翼にケガを負ったんだ。」白い竜はとても悲しそうに答えました。

黒い竜はもう本当に飛ぶことができないのかと尋ねました。

白い竜は一つだけ方法があると言い、その方法を聞きました。それは百年に一度だけ生まれる黒い竜のうろこを食べるという方法でした。

黒い竜は、おどろきが止まりません。自分のような黒い竜が百年に一度しか生まれてこないほどめずらしい生き物だということに。黒い竜は自分のうろこを牙ではがし白い竜に渡そうとしました。

白い竜はおどろいて言いました。「なぜ君は見ず知らずの私にここまでしてくれるのか」

黒い竜は少し寂しそうな声で「僕はこの見た目だから怖がって誰一人も友達がいないんだ。だから君が僕の友達になってくれないかな。」と言いました。白い竜は黒い竜に少し照れた様子で「もちろん」と答え、黒い竜のうろこを受け取りました。

むかしとある遠いとおい空の上に二頭の竜が飛んでいました。それはそれはとても美しい金色の目を持つ白い竜と黒い竜でした。二頭の竜はとても幸せそうに空の上へと飛んでいきました。